



全国各地から会員が参集した総会

日本篆刻家協会会報

第18号 平成29年4月1日発行
発行：日本篆刻家協会
563-0032 池田市石橋2-2-10-203
TEL 072-760-3852 FAX072-760-3853
E-mail: info@n-tenkoku.jp
http://www.n-tenkoku.jp

平成29年度総会開催

平成29年度総会が1月9日、ホテル大阪ベイタワーで開催され、全国各地から役員、会員計179人が参加した。



ごあいさつ

理事長 井谷五雲

二〇一七年の日本篆刻家協会の諸行事が動き出しております。

去る一月九日に本年度の総会が開催され、二〇〇人近くの会員が参集。昨年度・本年度の諸事業の確認がされました。昨年は初代理事長梅舒適先生の「生誕百年梅舒適展」、「第三十二回日本篆刻展」がともに兵庫県立美術館で開催され大盛況でありました。「中央研究会」、古河市篆刻美術館での「役員展」も例年通り開催されました。秋には浙江省杭州市の浙江美術館において、金石篆刻のメッカである西泠印社と共催で「西泠四君子展」が盛会裏に終了することができました。本協会からも三〇〇人の訪中団を組織して参加しました。本年に入り、既に「東西印人交流」と称して日本を代表する印人の交流が東京で開催されました。その講演会には一〇〇人を超える参加者があり、会場に入りきれないほどの盛況でした。近々には本年度の「役員展」が古河市篆刻美術館で、「西泠四君子展神戸展」が兵庫県立美術館でそれぞれ開催されます。そして夏の「第三十三回日本篆刻展」「第一〇回中央研究会」を間近に控え、執行部は大わらわというところですが、まずは本協会の諸行事は順調に運営されています。一定の成果を収めていると言えましょう。これも会員のお一人お一人のご協力の賜物と感謝するところでありたい。

本協会の設立趣旨、初代理事長梅舒適先生



井谷理事長の議長のもと肅々と進められた総会

が宣言された「書壇の傘下から抜け出し、書壇の影響を受けない篆刻独自の研究団体を設立する」という趣旨から鑑みて、展覧会・研修会・海外交流はその三本柱と言えましょう。また本協会は日本の印壇における最大規模の会員数を擁し、最長の歴史を誇る団体であります。これらのことを自覚しながら、今後に繋がっていかねばなりません。また各印社の運営問題や技術指導などを含めて、どのような些細な問題にも対処して参りたいと思っております。執行部の役員はもうろんのごとく、会員の皆様とともに努力をして参りたいと思っております。

本年最初の会報発行に際しまして、報告やお願いをいたしまして、一言ご挨拶とさせていただきます。

平成二十九年 役員

- 【常任顧問】 尾崎蒼石 山下方亭
- 【理事長】 井谷五雲
- 【副理事長】 喜多芳邑 多田龍淵 中島春緑 平田蘭石
- 【顧問】 真鍋井蛙
- 【代表理事】 市川兩儀 黒田玉洲 酒居石荘 小朴圃
- 【伊藤雅夫】 渡邊和琴
- 【名誉理事】 小林睦水 武井岳峰 田中緑翠 保田昌石
- 【常務理事】 池田泥巽 伊佐治祥雲 石原豊玉 出田塘霞
- 奥田辰生 梶川久美子 梶田稲州 草田翠苑
- 熊本夕生 黄平齋 榊原晴夫 田中修文
- 堤白遊 中村葉舟 南岳泉露 長谷川帰海
- 古溝幽畦 松本雅至 御手洗眉山
- 【参事】 師子堂房翠
- 【理事】 畔原裕美 足立瑠泉 阿部祥庵 稲垣華扇
- 射場少藍 宇於崎碧峯 遠藤孝子 大田桂翠
- 大橋安泰 大村雪陵 小上玉函 加納孝志
- 岸村爽風 北室南苑 木村容庸 興水泥魚
- 後藤黄太郎 坂本舜華 下井瑤琴 関踏青
- 竹内立女 多田稔里 田原良山 出来芳草
- 戸出九蔵 中林千影 滑田寒鴉 長谷川拓石
- 早川聰芳 東尾高岳 平松晃一 広瀬大濤
- 古野燕安 松本翠女 松本岬風 山根容園
- 横山龍児 吉江翠光 米田黄苑
- 【参与】 会田慶子 芦野優美子 安宅霞溪 石亀明峯
- 石川思玄 石原雲木 伊藤浄盧 稲葉竹葉
- 上田静雲 植野無人 太田華香 大槻彦裔
- 垣内誠峯 加藤静雲 金谷政治 川久保明
- 川西卯水 北野河聲 倉野看雨 剣田白峰
- 小谷知洲 坂上香艸 佐藤正明 正和杏葉
- 白尾芳雲 杉本素月 関野羊越 高野弘深
- 多田学友 田中九成 田中瑞峰 玉村芙葉
- 丹下青風 中田東光 西田茜秋 橋本碧峰
- 服部九姚 花村秀嶽 林旦山 樋口桃園
- 藤田孝風 藤縄尚子 堀口秀雄 増田繁治
- 松阪聖岳 松田泰軒 松本弘碩 水上健治
- 水巻游光 森豊苑 森原晋作 山崎一雄
- 葭岡慶石 吉田宗里
- 【評議員】 青木嘉代子 青木雄山 秋山捷華 浅野江涯
- 浅野春泉 浅野祥雲 浅野道男 浅野和泉
- 浅良朱華 池田蘆翠 井後雅堂 石留之然
- 伊藤錦汀 伊藤梅香 今村董圃 上松莊夢
- 内田紅楓 内田真弓 宇都宮蘭雪 梅原玉翠
- 大倉章義 岡上汀華 岡田桂舟 小川隼児
- 尾川雅舟 小國妙子 櫻野麗琴 片畑仁美
- 加藤正順 川崎白水 川田紅溪 北田成磊
- 橋高香流 木本研塵 串田一逕 小森香苑
- 近藤胡蝶 嵯峨洛山 阪口香雪 静一華
- 渋谷春好 嶋田杏園 鈴木紀山 鷹取千豊
- 巽聖石 立石見聲 田中翠仙 谷松洲
- 千蔵天空 千葉晨翠 寺田和仁 寺田清雲
- 寺本翠葉 土井純司 得永春水 中島大夢
- 中野聡 仲森蓬園 名倉克彦 西口青咲
- 野中紫光 島穆風 畑間青露 原田恵苑
- 坂正歩 坂東香璋 平田征男 廣田佳苑
- 藤川富美恵 藤村香代子 古瀬章石 細川恵苑
- 本郷紫香 馬景泉 牧野象山 松井碧香
- 松田静石 松田美津子 松竹芳翠 松野碧泉
- 松本清苑 丸山沙舟 水野和香 南敏子
- 宮越素翠 宮野宗雄 村田祥鳳 村松瓊玉
- 安井芳泉 山口敦子 山田青溪 山吹緑
- 山村千秋 山室雅美 山本恵子 山本寿法
- 横井青蓮 吉田雅風 若杉彩雲 渡辺北舟
- 渡邊尚石

上：新年懇親会で挨拶する井谷理事長（右）、全国からの会員が参集し交流を深めた新年懇親会（左） 下：尾崎常任顧問の発声で乾杯（右）恒例の福引の一コマ（左）



上：今年度の運営について基本的事項を協議する理事会 下：総会に先立ち開催された常務理事会（右）、理事会（左）

午後二時三十分からの総会は、就任二年目となる井谷理事長のもと、平成二十八年度事業報告、同決算報告、同会計監査報告、平成二十九年事業計画案、同予算案、展覧会成績による昇格人事が提案され、いずれも原案通り承認された。承認された平成二十九年役員は別表のとおり。なお、例年の会場が耐震工事のため、昨年度日本篆刻展は兵庫県立美術館ギャラリー棟での開催となったが、本年は改装が終了した兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリーで時期を七月にずらせた開催となる。また、昨秋杭州市で開催された「西冷印社四君子展」を日本国内にある四人の作品を追加補充して、五月に神戸で開催することが報告された。

総会に先立ち、昨年十二月十八日には常務理事会、前日一月八日に企画委員会、当日午後一時からは六十人が参加して理事会が開かれ、総会準備とともに第三回展審査員、平成二十九年実務機構業務分担、小中学生篆刻作品展を高校生まで広げた「第一回日本篆刻家協会学生展」要項等が協議された。

総会に引き続き新年懇親会が開催された。

理事長挨拶、常任顧問による乾杯で開宴され、新役員が紹介された。宴もたけなわとなり企画委員提供の福引でさらに盛り上がり、全国各地からの参加者は久しぶりの再会に和気藹々と交流を深めた。

賑々と進められた総会

八月課題 「漁歌入浦深」

八月課題 「漁歌入浦深」

役員(山下方亭選) 克彦

常任委員(黄平齋選) 戲石

委員(榊原晴夫選) 龍生

會員(田中修文選) 五岳

一般(堤白遊選) 碧翠

役員(尾崎蒼石選) 拓石

常任委員(松本雅全選) 碧風

委員(御手洗眉山選) 龍生

會員(池田泥異選) 梅風

一般(伊佐治祥雲選) 鈴輪

役員(山下方亭選) 克彦

常任委員(黄平齋選) 戲石

委員(榊原晴夫選) 龍生

會員(田中修文選) 五岳

一般(堤白遊選) 碧翠

役員(尾崎蒼石選) 拓石

常任委員(松本雅全選) 碧風

委員(御手洗眉山選) 龍生

會員(池田泥異選) 梅風

一般(伊佐治祥雲選) 鈴輪

役員(山下方亭選) 克彦

常任委員(黄平齋選) 戲石

委員(榊原晴夫選) 龍生

會員(田中修文選) 五岳

一般(堤白遊選) 碧翠

役員(尾崎蒼石選) 拓石

常任委員(松本雅全選) 碧風

委員(御手洗眉山選) 龍生

會員(池田泥異選) 梅風

一般(伊佐治祥雲選) 鈴輪

九月課題 「萬戸擣衣聲」

九月課題 「萬戸擣衣聲」

役員(渡邊和琴選) 汀華

常任委員(中村葉舟選) 草翠

委員(南岳泉雲選) 華紅

會員(長谷川帰海選) 喜雨

一般(古溝幽畦選) 勝竹

役員(井谷五雲選) 静雲

常任委員(石原豊玉選) 博石

委員(出田塘霞選) 秋露

會員(奥田農生選) 五岳

一般(梶川久美子選) 政夫

役員(渡邊和琴選) 汀華

常任委員(中村葉舟選) 草翠

委員(南岳泉雲選) 華紅

會員(長谷川帰海選) 喜雨

一般(古溝幽畦選) 勝竹

役員(井谷五雲選) 静雲

常任委員(石原豊玉選) 博石

委員(出田塘霞選) 秋露

會員(奥田農生選) 五岳

一般(梶川久美子選) 政夫

役員(渡邊和琴選) 汀華

常任委員(中村葉舟選) 草翠

委員(南岳泉雲選) 華紅

會員(長谷川帰海選) 喜雨

一般(古溝幽畦選) 勝竹

役員(井谷五雲選) 静雲

常任委員(石原豊玉選) 博石

委員(出田塘霞選) 秋露

會員(奥田農生選) 五岳

一般(梶川久美子選) 政夫

十月課題 「主人公」

十月課題 「主人公」

役員(尾崎蒼石選) 拓石

常任委員(松本雅全選) 碧風

委員(御手洗眉山選) 龍生

會員(池田泥異選) 梅風

一般(伊佐治祥雲選) 鈴輪

役員(井谷五雲選) 静雲

常任委員(石原豊玉選) 博石

委員(出田塘霞選) 秋露

會員(奥田農生選) 五岳

一般(梶川久美子選) 政夫

役員(尾崎蒼石選) 拓石

常任委員(松本雅全選) 碧風

委員(御手洗眉山選) 龍生

會員(池田泥異選) 梅風

一般(伊佐治祥雲選) 鈴輪

役員(井谷五雲選) 静雲

常任委員(石原豊玉選) 博石

委員(出田塘霞選) 秋露

會員(奥田農生選) 五岳

一般(梶川久美子選) 政夫

十一月課題 「叩囊底智」

十一月課題 「叩囊底智」

役員(井谷五雲選) 静雲

常任委員(石原豊玉選) 博石

委員(出田塘霞選) 秋露

會員(奥田農生選) 五岳

一般(梶川久美子選) 政夫

役員(井谷五雲選) 静雲

常任委員(石原豊玉選) 博石

委員(出田塘霞選) 秋露

會員(奥田農生選) 五岳

一般(梶川久美子選) 政夫

役員(井谷五雲選) 静雲

常任委員(石原豊玉選) 博石

委員(出田塘霞選) 秋露

會員(奥田農生選) 五岳

一般(梶川久美子選) 政夫

十二月課題 「有銭可使鬼」

一月課題 「無爲」

東西印人交流講演会に参加して

去る二月十八日午後、**「がんばろう！東北展」**をきっかけに始まった東西印人交流会の講演会に参加させていただいた。会場は東京御茶ノ水のあるビルの一室。扶桑印社、全日本篆刻連盟、日本篆刻家協会の著名な先生方とその門

人が大勢集い、立ち見席ができるほどだった。はじめに扶桑印社遠藤代表のご挨拶があり、続いて日本篆刻家協会井谷五雲理事長の講演が始まった。題名は**「怡齋蔵選・中国の詩箋譜」**。南紙と呼ばれる紙を小さく裁断した便の良い紙を箋紙、そして詩を揮毫する都合の良い箋紙を詩箋、箋紙を本のページ大に揃え、綴じ合わせる書物にした物を箋譜とわかり易く説明をされ、精緻な線描や博古図、**「拱花」**と呼ばれる型押しのみで色彩を使用しないものなどがあしらわれた最古の詩箋譜である『羅軒変古箋譜』や『十竹齋箋譜』など十九もの箋譜が展覧された。

講演する日本篆刻家協会井谷五雲理事長

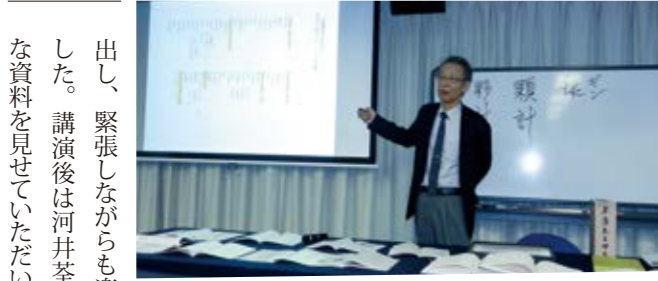


次に全日本篆刻連盟河野隆会長が**「河井荃蘆刻・朝鮮李王用印二種」**について講演された。この朱白二対の印(李王垠印、明新翁)は昭和五年荃蘆六〇歳の作で朝鮮李王の依頼で刻

スライドを交え講演する全日本篆刻連盟河野隆会長



席がなくても熱心に聴講する参加者



されたもの。荃蘆が到達した最后期の印風を示すものとして注目されているといわれ、西川寧先生が印跋を書かれていて、その印影と印跋について釋文の筆記試験があり、学生時分を思い出し、緊張しながらも楽しい一時を過ごした。講演後は河井荃蘆印譜など貴重な資料を見せていただいた。

今年は東京で開催されたためか、会場には東の先生方が多く、特に年齢の若い方が多くおられたのが印象的だった。東と西を比べると気候も言葉も違うし、篆刻作風も違う。私は残りの人生東の影響をどれだけ受け、新しい何かをどれだけ発見できるのだろうか。今回東京へ参加させていただき、少し新鮮な気持ちになった。(畑間青露)

資料を見ながら意見交換する各団体幹部

Grid of red square seals with names and titles. Categories include: 役員 (喜多芳邑選), 常任委員 (梶田稲州選), 委員 (草田翠苑選), 会員 (熊本夕生選), 一般 (黄平齋選). Names listed include 政夫, 一哉, 邦夫, 慶石, 汀華, 青露, 明峯, 仁美, 静雲, 草翠, 碧嵐, 淡石, 千博, 輝雄, 春壽, 豊, 五岳, 信夫, 昌子, 戲石, 千春, 秀子, 豊, 千春, 信夫, 昌子, 戲石, 静雲.

Grid of red square seals with names and titles. Categories include: 役員 (平田蘭石選), 常任委員 (梶原晴夫選), 委員 (田中修文選), 会員 (堤白遊選), 一般 (中村葉舟選). Names listed include 翠庵, 信夫, 淡石, 墨石, 慶石, 道男, 和香, 拓石, 濱州, 青楓, 黎秀, 雪峰, 美華, 昌雲, 克衛, 義男, 濱石, 悦治, 不條, 豊, 悦治, 俊彦, 南堂, 五岳, 俊彦, 南堂, 五岳, 克衛, 拓石.



ここに掲載の吳昌碩刻印①「也軒」は現在、東京の個人蔵のもので、材は寿山系のシットリとした美材である。側款には「庚戌十二月缶盧」とあり、吳昌碩六十七歳（一九一〇年）の刻である。（縦二十三mm×横二十三mm×高さ四〇mm）

印面を拡大してみると吳昌碩の刀さばきがよく分かる。「也」字下方に大きく残る朱に対し吳昌碩が雅味を加えている。これを見ても分かるように吳昌碩は刃先でこの雅味をつけており、印刀のお尻の部分を使用したものではない。下方辺縁から「也」字に向けての生々しい刀痕も故意であろう。（吳昌碩はこの種の方法をあまり用いない）ただ、「也」字右部辺縁「軒」字左部への撃辺は刀のお尻、側面などを使ったであろう痕跡がある。これらを見ていると吳昌碩は刀全体を使って一作を仕上げていることが見て取れる。

さて②の「今泉彰印」を私は実際にみていないが、印の大きさからして①②は対章かもしれない。「也軒」は、今泉雄作のことであり、彼の求めに応じ奏刀したのであろう。

※今泉雄作（一八五〇～一九三一）

明治・大正時代の美術史家。嘉永三年六月十九日生まれ。明治十年パリに留学。ギメ美術館で東洋美術を研究。帰国後、岡倉天心らと東洋美術学校（現東京芸大）の創立にこわわる。のち京都市立美術工芸学校校長、帝室博物館美術部長、大倉集古館館長などを歴任。昭和六年一月二十八日死去。八十二歳。江戸出身、名は彰。字は有常、号は文峰、也軒、常真居士など。著作に『君台観左右帳記考証』などがある。



Exhibition of Four Co-Founders of Xiling Society of Seal Arts

日中国交正常化45周年記念

西泠四君子

丁仁 王昶 葉銘 吳隱 書画篆刻作品展

展示内容
『西泠四君子展』
四君子関連書画篆刻作品及び文物

『西泠印社藏名家刻印扇面展』

日本人西泠印社名誉理事・名誉社員作品
在日華人西泠印社理事・社員作品

2017.5.3(水・祝)-7(日)

10:00~18:00 (入場は17:30まで) ※最終日は16:00まで

兵庫県立美術館 ギャラリー棟3F

神戸市中央区脇浜海岸通1丁目1番1号

大きな画像で四君子の紹介



書会で揮毫する井谷理事長



午後は印学博物館に移動。赤い大きな「扶桑六轡書画作品展」の看板が目飛び込む。館内に一歩入ると三人の先生方のなつかしい作品群、税関の手続きの不備で今夏の一部は飾れなかった由、が、そんなこともあろうかと万が一に備え持参さ

浙江美術館のゆったりとした会場



四君子の子孫によるテープカット

それぞれが家族が紹介され、拍手の中テープカット。そしてご家族を囲んでの記念撮影となった。大きな美術館四室に亘って展示されている書画や、印などを鑑賞、一〇〇年に及ぶ歳月を経た一堂に展覧される作品群は素晴らしく、時間がもう少しあればと残念な気持ち。日本篆刻家協会会員提供の四君子に関する作品や印譜なども多数陳列されていて見ごたえがあった。

■九月二十九日(二日) 杭州入り
関西空港発組、中部空港発組は、午後、上海蔵寶楼にて台流、夕食後バスにて杭州へ。宿泊ホテルにて井谷理事長、小代表理事と台流。
■九月三十日(三日)
四君子展 開幕式(於浙江美術館・西泠印社主催 魏景康(玉皇山莊)・扶桑六轡会) 開幕式(於印学博物館)・茶会、書会(於西泠印社庭園)・日本篆刻家協会主催茶礼宴(花園餐厅) 十時より開幕式。
西泠印社創始者である四君子、丁仁、王昶、葉銘、吳隱の功績を讃えて西泠印社副社長兼秘書長陳振濂先生また美術館館長斯舜威先生等諸先生方のご挨拶があり、続いて井谷理事長が「四君子展」開催の喜びと関係各位へのお礼を述べられた。
日本篆刻家協会は、西泠印社名誉副社長梅舒適、山下方亭、尾崎蒼石の二人の名誉理事、七人の名誉社員、井谷、喜多、多田、中島、平田、真鍋、小を擁し、西泠印社とは綿密な関係にあり、このように手を携えて共に発展していることは誇らしいことである。と、そしてまた二〇一七年五月に兵庫県立美術館に「四君子展」を迎えるにあたり、諸先生方にその支援を請われた。
次に四君子のそれぞれのご家族が紹介され、拍手の中テープカット。そしてご家族を囲んでの記念撮影となった。大きな美術館四室に亘って展示されている書画や、印などを鑑賞、一〇〇年に及ぶ歳月を経た一堂に展覧される作品群は素晴らしく、時間がもう少しあればと残念な気持ち。日本篆刻家協会会員提供の四君子に関する作品や印譜なども多数陳列されていて見ごたえがあった。

河坊街散策(杭州)
吳昌碩の故居、入口の両脇の銀木犀の大樹が、残花の匂いをかすかに放っていた。渡り廊下のそこに飾られた作品、使用されていた机や椅子、日常品等部屋ごとにもそのままに展示されていて、どこからか缶詰が現れるような気がした。吳昌碩故居の石碑の前で記念の集合写真撮影。昼食の前に談香山原花原(百草苑)に立ち寄る。雨不足でほとんどが枯れ草。かろうじて色を添えている黄色の小花やコスモスをバックに記念撮影。広大な花原を電気自動車で一巡り、花は残念だったが吹く風が頬に心地よかった。
諸菜三芸術館へ。吳昌碩の高弟菜三、篆刻も

れていた旧作も交えられていて、私たちには新しい作品を加えられたような新鮮味があつて嬉しく、また会場内に漂う柔らかな雰囲気にも日本を感じ、感激であつた。次に西泠印社の、小高い丘の木々に囲まれた庭園に移動。昨日の雨も上がり、木漏れ日の下に設えられたテーブルの白布が眩しい。和気あいあいと茶会は進み兩國の歌や芸能の交換がなされる一方、書会では皆が見守る中、大きな画仙紙に岩、松、蘭と描き進められ「友誼長青」の書が入り、呂国璋先生ら三人の合作が完成。日本の諸先生方の書も次々完成。その都度大きな拍手がわいた。
日も傾く頃、蓮の葉と柳の糸、湖の向こううつすらと暮れ残る山並みを眺めながら西湖の畔を歩いてバス。答礼宴へと向かった。
夕食会は喜多副理事長の司会で進行。西泠印社副社長陳振濂先生はじめ副秘書長黃鎮中先生ら多数の先生方からのご挨拶をいただく。続いて日本側参加者の紹介。井谷理事長の挨拶。そして乾杯となり、それぞれ美酒を酌み交わし交流を温めた。宴も終り頃には書会が始まり、双方の先生方の思いの溢れた書が、次々交換された。
■一月一日(三日)
吳昌碩の故居安宅へ(ゲスト 黃鎮中先生、韓天雅先生、談香山野花原へ、諸菜三芸術館見学・吳昌碩記念館見学)



開会式場での記念撮影



烏鎮での水上散策

書画も吳昌碩の影響が色濃い。訪中の折の若い梅舒適先生の写真に出会う。なつかしい。次に吳昌碩記念館へ。いつも図録で見ている作品が生で目の前にあることの感動は格別。長尾雨山宛の書簡等もあり興味深かった。
■一月二日(四日)
黄教奇書法展見学(於西泠印社美術館)・吳讓之、趙之謙書画印珍品展見学(於浙江省博物館・烏鎮へ、さよならハナター(上海唐宮レストラン)
西泠印社社員であり日本篆刻家協会常務理事黄教奇先生の書法篆刻展を見学。書の大作も沢山で、日本の作品とは又異なった趣きでいい勉強になった。『吳風趙格』と表題された吳讓之、趙之謙書画印珍品展。吳讓之のすっきりとした貴公子のような作風、趙之謙の粘りつよい濃厚な作風を、このように同時に対比して鑑賞できることに感激、往つたり来たり、いつまでも眺めている。
おそめの昼食をとり人気の観光地烏鎮へ。アジアのベニスと呼ばれる烏鎮。運河に沿う二〇〇〇余年の歴史を持つ古い街を歩く。戻りは櫓の舟で二十分ばかり。緑の水をゆつくりと進む。柳の影、家並みの影がギーコギーコと鳴る櫓の音に揺れる。何千年も前に身を置いているような錯覚。川風に往きの汗もすっかり治まった。
■一月三日(五日)
上海を港より帰路へ
此度の「四君子展」開幕式参加の旅では、四君子のみならず、吳昌碩、諸菜三、吳讓之、趙之謙など多くの作品にも直にふれることができた。脈々と受け継がれ、そしてまた新しいものを加えつつ次世代へと引き継がれていく芸術、文化の素晴らしさを肌で感じ、「四君子展」に云う、「古を今の鑑に、をしつかりと心に刻んだ旅となった。
(奥田晨生)

神戸で「西泠四君子展」開催

この西泠印社創設の四人の書画篆刻作品を中心に、印譜その他の関連書物、および西泠印社とその周辺、また創世記の印社の歴史を語る写真と資料を、ここ神戸の地、兵庫県立美術館において展観することになりました。

この展覧会は昨年秋季に浙江省杭州市の浙江美術館において西泠印社・日本篆刻家協会・浙江美術館の三者が主催して開催されたものに加えて、日本丁鶴齋研究会にも主催の一翼を担っていただきました。そして新たに西泠印社所蔵の中国名家刻印扇と日本在住の西泠印社社員作品を加えて、規模を大きくして開催するものであります。また四君子の作品につきましても、新たに日本の收藏家の皆様から展覧に供すべく借用いたしました。今までの例を見ない質・量を誇る展覧会となりました。書画篆刻・金石文字の研究創作に携わる方々はもちろん、一般の皆様にも大いに楽しんでいただける展覧会であると申せます。(井谷五雲)

展覧会成績

第六十二回 全関西美術展

無鑑査

日本書芸院大賞

松本雅至

公募

全関西美術展賞

第二席

山本龍石

公募

全関西美術展賞

第三席

古野燕安

公募

全関西美術展賞

佳作

平田征男

日本書芸院賞

岡上汀華 黒田悦子

妻島明子 安井芳泉

武田黎秀 西岡青淡

嵯峨洛山 丹下青風

改組新第三回日展

入選

井谷五雲 真鍋井蛙

小朴圃 喜多芳邑

古溝幽畦 黒田玉洲

田中修文 出田塘葭

関踏青

武井岳峰(新)

第一回陳介祺芸術節

「問道萬印樓 日本当代篆刻名家作品中国展」

参加日本篆刻家協会訪中団



開幕式が行われた会場広場の舞台

■九月一日(二日目)

閑空に九時三〇分集合。参加十一名。バスで二時間あまりの天柱山に向かう。一五〇段くらいの石段を上がった所に磨崖碑「鄭文公上碑」が保存されていた。碑文の文字はよく見えなかったが、その存在に団員一同感激しきりで記念撮影をおこなう。そこから陳介祺芸術祭のメイン会場である濰坊へ、ホテルに着き芳名録代わりに大きな寿山石(高さ約五〇センチ。一辺約



天柱山上り口の門前で、後方岩山の中腹に碑廟壇「豊十鐘山房与当代篆刻创作學術研討会」に参加。蘇士湖中国書法家協会主席・駱芃芃 中国篆刻研究院院長など錚々たるメンバーが出席され、各国代表の先生方が熱く語られていた。日本篆刻家協会からは尾崎蒼石先生と井谷五雲先生の発表が行われた。夕食後京劇を鑑

二十五センチ)の側面に姓名を刻し記録とした。

■九月二日(二日目)

午前は第一回陳介祺芸術節開幕式に出席。日本篆刻家協会常任顧問で陳介祺研究会の顧問でもある尾崎蒼石先生と協会理事長の井谷五雲先生もひな壇に並び、開幕式を盛り上げた。その後、「問道萬印樓 日本当代篆刻名家作品中国展」を見学。会場は六室に分かれていて、その一室に陳介祺の関係資料や書作作品の展示室があり、尾崎先生が出品された陳介祺作品も壁面を飾っていた。そして天津から来られた陳介祺七代目の陳准と親しくお話しできて大変有意義な時を過ごした。そのあと、隣接する郭味蕓先生の故居を訪れ、当時の生活の様式を偲ぶことができた。



芳名録代わりの巨大印材に名前を刻する

賞 日本の歌舞伎を思わせる演技そして文化に感動した。その後は、山東印社・陳介祺研究会・萬印樓印社・山左金石研究会による授与式、日本篆刻家名譽職務儀式が開催され、尾崎先生・井谷先生は、萬印樓印社名譽顧問に就任された。さらに尾崎先生は山左金石研究会顧問に推挙され、井谷五雲先生は山東印社名譽社員に迎えられた。



学術研討会で発表する井谷理事長

■九月三日(三日目)

バスで二時間余りをかけて移動し、貴重な鉄山刻磨崖大集経を見学する。鄒城博物館では葉子候刻石ほか多くの漢碑や画像石を見ることができた。済寧博物館では時間外にもかかわらず、山東印社社長・范正紅先生のご尽力と済寧の書道家の方々の案内で漢碑館を見学。非公開の貴重な碑を多く見せていただけ非常に勉強になった。

■九月四日(四日目)

濟南西駅から新幹線で二時間半、北京に到着した。紀曉嵐の故居の晋陽飯荘で昼食後、団員待望の琉璃廠へ向かい、各自好きな文物の買い物を楽しんだ。夕食は全集徳で北京ダックをいただき、お腹も満足し、宿泊先の中蒙大酒店に向かった。

■九月五日(五日目)

朝食後、宿舎から徒歩で行ける潘家園旧貨市で印材や書道用具を涉猟、駆け引きを楽しみながら買い物した。昼食後、北京首都国際空港より、無事帰国できた。

今回の訪中では金石家の陳介祺を深く知ることができ、山東省各方面の更なる交流を念じて訪中記といたします。(堤白遊)

月例作品募集(二〇一七年)

前号掲載の課題に誤字がありました。印社代表を通じ、訂正いたしました。念のため再掲載します。

- 一月 無為
- 二月 從所好
- 三月 行己有恥
- 四月 心手雙暢
- 五月 得其樂
- 六月 獨往
- 七月 消夏閑無事
- 八月 聊自樂
- 九月 龍得水
- 一〇月 少無宦情
- 二月 斬釘截鐵
- 二月 古人重讀書

■送付先

〒五三三・〇〇三三

大阪府池田市石橋二丁目二一〇

牧野ビル二〇三

日本篆刻家協会「〇月課題」係

お問い合わせ(協会事務所) 電話〇七二・七六〇・三八五二

第33回 日本篆刻展

特別展観 文房古玩―水滴・水盂をはじめとして― 併催 第一回日本篆刻家協会学生展

2017年 7/12(水) ▶ 17(月・祝) 10:00~17:00 (入館 16:30まで) (最終日は 16:00 終了)

兵庫県立美術館 王子分館 (原田の森ギャラリー) 神戸市灘区原田通3丁目8-30 電話(078) 801-1591

主催・問合せ先 日本篆刻家協会 大阪府池田市石橋2丁目2-10 牧野ビル203号 電話(072) 760-3852

後援 兵庫県・兵庫県教育委員会、神戸市・神戸市教育委員会 中国駐大阪総領事館、大阪府日中友好協会 公益財団法人 兵庫県芸術文化協会、神戸新聞社

青鏡忘詠(十四) 小朴圃

「備えあれば」

偶然欲書という時にすぐ筆や刀を持ってるように、机上を常に整理しておくとい。と梅先生が初心者に言っておられたことを思い出す。書こうかなと思った時に、まず机の上を片付けてから、ということでは、やろうという気持がそのうちに抜けてしまう。

一方ある印友は、刻がうまく行かぬとすぐに用意していた別の印材を取り出して、別態を刻す。その姿はあたたかも、一枚目がうまく行かなかつたら二枚目の紙といった書の如くであった。そのすぐさま別の石に取り組む様は、頭に浮んだ構想

を逃がすまいとするようでもあった。

机上を整理しておくことといい、印材を磨って用意しておくことといい、一見簡単なことのように思えるのだが、これが実に難しい。特に数年後に必要になろうという本があれば、できるだけ資料として手元においておきたい小生、狭い書齋はだんだんと書物が占領することとなる。同様のことを先輩の文で読んだ記憶があるが、明窓浄几で刀や筆を執り書に親しむときは来るのであるうか、梅先生の言が聞こえてくるような気がする。

雑然とした処からこそ、真の作品は生まれると聞き直るか。

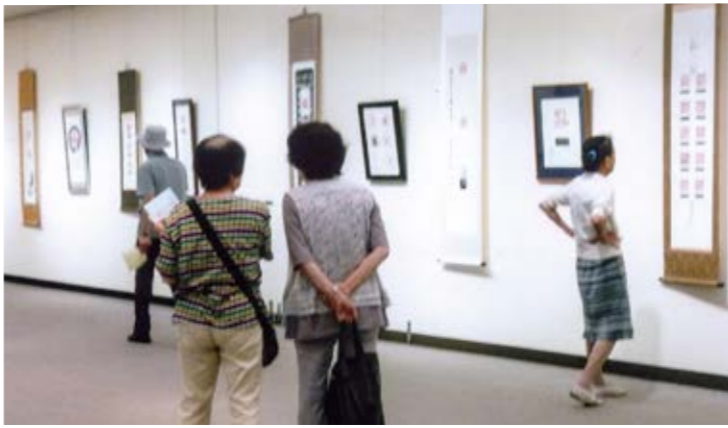
各印社活動 トピックス

第三十六回 越思篆会篆刻作品展

富山市民大学篆刻同好会作品展

第三十六回越思篆会篆刻作品展並びに富山市民大学篆刻同好会作品展が七月一日〜三日、七月十五日〜十七日の会期において、富山県高岡文化ホール、富山県民会館の両会場にて開催致しました。

同好会展では来場者の方に「印象に残った作品」を投票して頂き、地元「立山」を題材とした作品が好評を博していました。また、同会の創始者「大村高陵遺作展」を企画し、



同時開催をしたところ、多数の皆様にご来場を頂き、故人を懐かしむ声を沢山頂戴し、和やかな雰囲気の中、会期を終える事が出来ました。(大村雪陵)

扶桑六轡書画篆刻作品展

「ここに陳列してある作品は、実は二番手の作品です。」「一番手とはいえ、どうです？結構良いでしょうか?」「一番手の作品は作品集で見、素晴らしい二番手の作品を実際に見ることが出来る、このことは幸運だったといえるかも知れません。」「こんなことを挨拶で話したのを覚えているが、実はG20の編りを受け通関が殊の外厳しく、八方手を尽くしたのだが結果作品が通関できず、税関に止め置かれたのだ。」「最悪こういうこともあらんと、二番手の作品をトランクに入れての訪中だったのだ。」

印学博物館での扶桑六轡書画篆刻作品展は、我々三名にとつて悲願であった。お陰様で数多くの参観者を見、何と記念の書会は弧山山頂の木立の中で、お茶を飲み談話後、興が高まれば筆を執るといふ風で、真に文人の



第十四回関中篆刻・篆書展

紅葉もそろそろ盛りを過ぎようとしている十一月十七日〜二十日までの四日間関中文化会館二階において、平田蘭石先生を主宰とする第十四回関中印社篆刻・篆書展が盛大に開催されました。隔年の開催にも拘わらず、以前にもまして力作揃いで、今回は篆刻、篆書の自由作品の他、菜根譚句の課題作品など百五十九点の作品を展示しました。

社中展という自由な作品づくりで、一人ひとりの作品への思いが、印泥の赤、墨の濃淡紙の色、素材などにて、一般の書道展とはひと味違う楽しさ、工夫がみられ、初めて見る方にも楽しんでいただけました。

パソコンが主となった現代だからこそ、文字を素材とし、掌の中に収まる小さな印の作る、方寸の世界の中の古代の文字学、独自の輝き、広がり一人でも多くの方に知っていただければと願っています。

会期中は、ご多忙の中、五六二名と多くの方々にご高覧を賜り、心より感謝、お礼を申し上げます。今後も一層のご指導を賜りたいと存じます。(伊藤梅香)



第二十三回一隅会展

富山での「谷聴泉展」には寄せていただくこと叶わず仕舞いでしたが、縁あって小冊子を拝読。篆刻家と思しきや、豈図らん日本画家、はたまた俳人とは、己が無知に恥じ入るばかり。絵がすばらしい。書もおもしろい。四十二歳にて急逝。



さて、一隅会展。皆さんそれぞれに励んでおられる様子。独白色を匂わすこなれた作品群。多くの来観者と和やかなムード。ではあります。若手と言われてはや数十年。「ちんぷいぶい」というテレビ番組に「昔の人は偉かった」というコーナーがありますが、一隅同人もいずれば昔の人。作品の出来もさることながら、「偉かった」と言われるような更なる日々の研鑽を、次の一手を考えられんことを楽しみにいたしております。篆刻という小さな世界であるからこそ、一層の飛躍をこ期待申しあげ参観記とさせていただきます。(I)



第三回伍葉展

一月二十日から二十二日まで神戸元町のみなせ画廊にて第三回伍葉展を開催しました。雪の降る悪天候の中、三百人を超える方々に足を運んでいただきました。この場をお借りし、御礼申し上げます。 展覧会情報をSNS等で発信したことで、協会会員はもとより他分野の方や関東など遠方の方々も足を運んで頂き、今まで以上に展覧会を通じて様々な方々と交流させていただきました。

今回は硯をテーマに五大名硯を展示、会場表の分刻作品では端溪硯の漢詩を分刻し、また入口の分刻作品では五大名硯名をそれぞれが刻しました。特に会場表に展示した分刻作品は五人の個性がよく出ているとお声をいただきました、これから



も毎回来しみにしていただけるよう頑張りたいと思います。今後とも高覧頂きますようお願いいたします。(稲垣華扇)

篆刻家協会の後援のもと、昨年に引き続き磐田市立中央図書館展示室で開催しました。会場に余裕があり十四名の会員が一人三点〜五点出品することができました。篆刻と書作品に彫書も加えまた机上には印材も展示しました。

「日本の七十二候」と来年の干支印は全員で分刻し「日本の七十二候」は印譜とし、干支印は印影のコピーを希望される方に差し上げました。

名古屋市、静岡市からも協会会員が来館され熱心にご覧になり親しく話をさせていただきました。我々にとり大変励みになりました。九日の期間中、七〇五人の方が入場されました。(鈴木紀山)



展覧会案内

- ▼随風会(山下方亭)
第三回随風会書法篆刻展
会期 四月二六日～三〇日
会場 京都市美術館 別館
- ▼第九回日本篆刻家協会役員展
会期 四月二九日～六月二二日
会場 古河市 篆刻美術館
- ▼中日国交正常化四五周年記念
西冷四君子書画篆刻作品展
会期 五月三日～七日
会場 兵庫県立美術館本館ギャラリー棟
- ▼第三回日本篆刻展
会期 七月二一日～二七日
会場 兵庫県立美術館王子分館(原田の森ギャラリー)
- ▼齊平篆会(真鍋井蛙)
第一九回齊平展 テーマ展示「風」字印
会期 九月三〇日～一〇月二日
会場 大阪産業創造館三階マーケットプラザ
併催…会員蔵生誕百年梅舒適先生作品展
- ▼畦石舎(小朴圃)
篆刻・書・画 第三回畦石舎作品展
会期 一〇月一日～二日
会場 日図デザイン博物館
- ▼篆誦社(古溝幽畦)
第九回篆誦社游藝展
会期 一一月二五日～二七日
会場 アートホール神戸

協会行事

- 海外交流
「問道萬印樓」
「当代日本著名篆刻家作品展」
開幕式参加訪中
九月一日(木)～五日(月)
莱州(天柱山)・濰坊・濟寧・北京
- 海外交流
扶桑六轡書画篆刻作品展
九月二八日(水)～一〇月三日(月)
西冷印社印学博物館
- 海外交流
黄平齋書画篆刻作品展
九月二九日(木)～一〇月二三日(木)
西冷印社美術館
- 海外交流
西冷印社「四君子展」
開幕式参加訪中
九月二九日(木)～一〇月三日(月)
浙江美術館
- 常務理事会
十二月三日(土)
錦城閣
- 理事会・総会・新年会
二〇一七年二月九日(月・祝)
大阪ベイタワーホテル
- 協会パンフレット発行
三月

予定

- 第九回日本篆刻家協会役員展
四月二九日(土・祝)～六月二二日(木)
古河市立篆刻美術館
- 西冷印社四君子展
五月三日(水)～七日(日)
兵庫県立美術館ギャラリー棟
- 第三三回日本篆刻展 審査会
五月二〇日(土)～二二日(日)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)
- 第三三回日本篆刻展
七月二二日(水)～二七日(祝)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)
- 授賞式
七月二五日(土)
ANAクラウンプラザホテル神戸
- 第一〇回中央研究会
八月五日(土)～七日(月)
シーサイドホテル舞子ヒラ
- 常務理事会
十二月二日(土)
錦城閣

慶事報告

祝 常任顧問 尾崎蒼石先生
平成二八年年度大阪市長表彰
(芸術文化振興と発展)受賞
平成二八年二月二日付

編集後記

☆阪神・淡路大震災から二十二年、新潟県中越大地震から十三年、東日本大震災から六年、熊本地震から一年、震災の記憶は年を経ても消えない。昨年は地震だけでなく災害が多発した。気象誌「月刊SORA」では二〇一六年自然災害一〇大ニュースとして「終わらない熊本地震」「迷走台風一〇号、岩手県などで死者」「北海道に台風上陸三連発」「梅雨前線、九州で記録的大雨」「鳥取県中部地震で農産物被害」「阿蘇山が爆発的噴火」「首都圏で積雪」「北海道で暴風雪、交通途絶」「首都圏で渇水、取水制限」をあげている。全国に広く会員が分布する本協会関係者の被災も耳にする。防災は難しいが減災は可能だと言われて久しい。

☆日本の自然災害リスクは世界一七位と言われている。災害が少しでも減るよう一人一人が取り組むとともに、篆刻でできる幸せを改めて噛みしめよう。(S)

編集・会報部

酒屋石荘 木村容庸 戸出九蔵

お気づきのこと、ご意見など
事務所までお寄せください。
FAX 072-760-3853
MAIL info@n-tenkoku.jp